

主 題：互いに慰め合うこと

聖書箇所：コリント人への手紙第二 1章3-4節

きょうのテキストⅡコリント1：3-4をごらんください。文脈を把握するために3-7節をお読みいたします。

☆ 「互いに慰め合うことにおいて成長する」

### Ⅱコリント1：3-7

:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。

:4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。

:5 それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。

:6 もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。

:7 私たちがあなたがたについて抱いている望みは、動くことはありません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをもとにしているように、慰めをもとにしていることを、私たちは知っているからです。

さて、今朝私たちがともに学びたいことは互いに慰め合うということです。今読んだ箇所を目で追いながら気づかれた方もおられると思いますが、パウロは3-7節の中で「苦しみ」、「苦難」、そして「慰め」ということばを繰り返し用いていました。またⅡコリント全体を見ても、自分の経験した「苦しみ」、「慰め」についてパウロはほかのどの書簡よりもこの書で触れています。私たちもよく知っているとおりに、きょうのテキストを記したこのパウロという人物の人生は困難、苦難の連続でした。彼ほどキリストのために迫害に遭い、キリストのために困難に遭い続けた人物はいませんでした。

#### A. パウロの人生「苦難」と「慰め」

そしてそんな彼がこのⅡコリントの後半に、このように記しています。Ⅱコリント11：23-27「私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」と。パウロは私たちが想像することのできない、私たちが経験したことのない非常に苦しい困難を経験しました。キリストの使徒として熱心に歩むがゆえに、鞭打たれ、迫害に遭い、食べる物も着る物もなく、寝ることもままならず、挙句兄弟と思っていた人たちから裏切りに遭ったパウロ。体も心もぼろぼろになっていたということはたやすく想像できます。神様、どうしてですか？なぜ私はこんな苦しみに遭わなければいけないのですか？そのように口にしてもおかしくはなかったでしょう。しかし、そんな苦しみに遭っていたパウロがこの手紙を通して、繰り返し繰り返し口にすることは、自分の受けた苦しみや苦難、困難よりも「慰め」でした。彼はこの書の中で繰り返し「慰め」について記しました。そしてきょうのテキストである3-4節の中にも多くの苦しみを受けていたパウロが神様に感謝の祈りを捧げている、そんな姿を見ることができます。パウロはたとえどんな状況の真ただ中にあっても「慰め」を味わい忠実に歩むことができました。どうして彼はそんな苦しみの中で不平を言わず、主の平安を持って歩むことができたのでしょうか？もっと言えば、そんな彼の歩みを可能にした「慰め」とは一体どんなものだったのでしょうか。

皆さん考えてみてください。今、私たちはパウロが経験したこの「慰め」や平安というものを経験しているでしょうか？なぜなら私たちもよく知っているとおりに、ここにいるひとりひとりも日々さまざまな困難や苦難、苦しみに遭遇するからです。小さな問題や健康、財政的な問題、友人や家族の問題、学校や職場での問題。置かれた場所でクリスチャンとしてあかしを立てることの難しさ、心が穏やかで、ああ、神様ほんとにきょうは感謝ですと思った次の瞬間、思いがけないことで心が乱され、苦しんだり悲しんだりすることを私たちはそれぞれに経験します。そして教会の中も例外ではありません。私たちは救われはしたものの、まだ罪の性質が残っているがゆえに、罪を犯し、互いを傷つけ、私はあの人をもう愛すことはできません、あの人をもう許すことはできません、そのような思いで私たちの心が満たされる時、私たちは平安を失うことがあるのです。

また私たちは生まれながらに自分の間違いを指摘されることを嫌います。だから自分の行いをそれは間違っていますよ、これが正しいですよ、聖書がこう言っているでしょうと、周りが自分のことを正そう

とする時反発し、そのことで平安や喜びを失うこともあります。またそれだけではなく、その正そうとした相手に対して、不満や怒りを持つこともあります。ですから、このみことばを見ていくに当たって明白なのは、ここにおられるひとりひとり、私は苦しみや困難に一切関係がありませんと言う人はいないということです。では私たちはそんな苦しみや困難な状況に一体どのようにして向き合っているのでしょうか？私たちが困難や苦しみの中に置かれた時、私たちはパウロが持っていた「慰め」、平安を持って歩むことができているのでしょうか？それともどうして自分がこんなに苦しい目に遭わないといけないのですかと悲しみ、そしていつもなぜ、なぜ、なぜと疑問を抱いているのでしょうか？もしくは自分が思い描いていたことと全然違う、自分の思い通りにならないことを嘆いているのでしょうか？また、困難や苦しみの中にある時、先の見えない現状に恐れや不安を抱いていないのでしょうか？もっと言えば、あなた自身に困難をもたらした物や状況、人や兄弟に対して不満や怒り、また愛せない、許せないという感情を心の中で抱き続けてはいないのでしょうか？

確かに私たちはいろいろな感情を抱きます。特に苦しみは怒りや混乱、不安や悲しみ、そういった渦の中に私たちを巻き込んでしまう大変なものです。しかし、聖書が私たちに教えることは、たとえあなたがどんな状況にあったとしても、私たちはパウロが教える「慰め」を味わうことができるということです。そしてこれまで見てきた互いに愛し合う、互いに赦し合う、互いに正し合うことと同じように、私たち罪人が教会にあって神の家族として一致し、クリスチャンとして日々忠実に歩み続けていこうとするのであれば、この聖書の教える「慰め」を持って互いに慰め合うことは必要不可欠なことです。私たちは皆同じように苦しみを経験します。ではどうすれば私たちはパウロが持っていたと同じ「慰め」を持って日々忠実に歩いていくことができるのでしょうか？どうすれば互いに慰め合うことにおいて成長することができるのでしょうか？そのことをきょうのみことばを通して、皆さんとともに考えていきましょう。このみことばが私たちを本当に心から励まし、ますますキリストに似た者になりたい、キリストに喜ばれる者になりたい、兄弟姉妹を愛する者になり続けたいと、そのように駆り立てるものになることを心から祈っています。

## B. 慰めに関する三つの教え

さて、早速ですけれども、聖書はパウロの教える「慰め」について3-4節のうちに三つのことを記してくれています。

### 1. 慰めの源＝神ご自身

まず一つ目が3節に記されています。3節「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。」、まず「慰め」に関してこの3節の中でパウロが教えたことは、「慰め」の源についてです。聖書の教える「慰め」が一体どこから来るのかということにパウロはまず触れたのです。そして明白なのは、この源とは神ご自身であるということを見ることが出来ます。

皆さんが持っている日本語の聖書では語順が逆になって最後になっていますが、この箇所の原文は「神がほめたたえられますように」、「神をほめたたえよ」ということばで始まっています。困難を経験していたパウロ、苦しみを味わっていたパウロが何よりも求めたこと、何よりもしたかったことは「慰め」の源である神様を心から礼拝することでした。パウロはこの「慰め」の源である神を心からほめたたえました。そしてパウロはほめたたえるべき神様のことを特に二通りの表現を用いて表しています。「慈愛の父」ということばと「すべての慰めの神」ということばです。あのシナイ山にあって、神様がモーセの前を通り過ぎられる時、神はモーセに対してこのように宣言されたことを出エジプト記34：6-7が記しています。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」と。またルカ6：36で「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」とイエス様は言われています。

#### 1) 慈愛の父

パウロは「慈愛の父」と表現しました。これは神様のご性質があわれみ深いお方だということを示しています。神様というのはまさにその存在そのものがあわれみ深い。そしてそのあわれみ深い本質は決して変わることがないと、まずパウロは言ったのです。この神様のあわれみというご性質は、そのあわれみを維持するためにほかの何かを必要とされることも、またご自分のあわれみをだれかに示す時に何か周りに影響されることも一切ない。この「慈愛の父」、神様はその性質があわれみ深いお方であるがゆえに、ご自分のあわれむものをあわれむお方だということを示す聖書は記しています。

旧約聖書を見れば、神様のあわれみが決して変わらないことを知っていたがゆえに、神の民はどんな状況にあったとしてもこのお方に信頼し、より頼むことができた、その姿を見ることが出来ます。イザヤ49：13の中には「天よ。喜び歌え。地よ。楽しめ。山々よ。喜びの歌声をあげよ。主がご自分の民を慰め、その悩める者をあわれまれるからだ。」と記されています。またエルサレムの陥落を目の前にして深い悲し

みと嘆きの中にいたエレミヤは次のように口にしました。哀歌3：22-23「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。『あなたの真実は力強い。』と。確かにエレミヤは深い悲しみの中にいました。彼の心は嘆きや不安、いろいろなもので満ち溢れていたでしょう。しかし、彼は同時にひとつのことをよく覚えていました。それは、たとえどれだけ自分の目にひどい状況に見えたとしても、どれだけ自分の心が悲しんでいたとしても、どれだけ自分の心が苦しみを覚えていたとしても、主権者なる主のあわれみは決して変わることはない。この主のあわれみが尽きることは絶対はない。だからエレミヤも感謝することができたのです。主はいつもどんな時もとたとえ苦しみの中にある時でさえも変わることはない、あわれみ深い慈愛なる父だと。

## 2) すべての慰めの神

またパウロは神を「すべての慰めの神」とも表現しました。ここで皆さんに少し注目していただきたいのは、父なる神様に対して使われているこの「慰め」ということばは、別の箇所イエス・キリストと聖霊なる神様に対しても用いられているということです。Iヨハネ2：1にイエス・キリストに対して「もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。」と記されています。ここでの「弁護する」ということばに同じ「慰め」ということばが使われています。また、聖霊なる神様に対してはヨハネ14：16の中に「父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」と出てきます。ここに使われていた「助け主」ということばに「慰め」ということばが使われています。ではそれは一体どういうことかと言うと、父なる神様の前で私たちのかわりに私たちのことを弁護してくださる私たちの救い主イエス・キリストも、私たちに救いとともにも与えられた聖霊なる神様も、そして父なる神様もそのご性質そのものが「慰め」だということです。私たちの心を慰めることができる、そういった性質を持ったお方が私たちの神なのだということを聖書は教えています。

聖書の教える三位一体の神、この方こそ私たちがこの世で経験することのできるあわれみ、慰め、そのすべての始まりだと、すべての源だということを聖書は教えています。だからこそパウロはこの慈愛なる神を、このすべての「慰め」である神を心から礼拝したのです。こんなすばらしい神が私とともにいてくださる、感謝ですと彼は心からほめたたえたのです。

## 2. 慰めの働き=忍耐を持って主に忠実に歩ませてくださる

パウロは神様が単に「慰め」の源だと、そのことだけを賛美したわけではありません。続いて4節の最初の部分に「神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。」と記しました。聖書が教える「慰め」に関して、パウロが教えたことの二つ目は「慰め」の働きについてでした。これは言い換えれば「慰め」の源である神様は実際にその「慰め」を私たちに示すことができるということです。神様はただ単に「慰め」の源にいるだけではなく実際にご自分の民に「慰め」を与えることができるのだと。そしてパウロは実際に苦しみの中にあって、この神様の「慰め」を経験することができたのです。ただ、ここで私たちが気をつけなければいけないのは、「慰め」の源である神様が示してくださる神の「慰め」というものは、この世が考える慰めとは少し異なるものだということです。聖書の教える神様の「慰め」というものと私たちが考えるこの世の慰めというものは違うということです。

私はこれまで何回も「慰め」ということばを使っていますが、この「慰め」ということばを聞くと、皆さんはどのようなものを思い浮かべるでしょうか？国語辞典を見ると、「慰め」に関してこのような定義がなされています。「何かをして一時の悲しみや苦しみを紛らわせる」、「悲しんだり、苦しんでいる人にやさしいことばをかけたりに心を和やかにさせ静まらせる」と。恐らく私たちがこの慰めということばを聞く時、私たちは「自分が自分や相手の感情、気持ちを何かをもって安らげてあげる」、また「満足させてあげる」とか「痛みや不安から解放される」といったイメージを持っていないでしょうか？また、もしこれまで「慰め」について考えたことがないと皆さんが思われるのであれば、自分の行動を振り返ってみてください。私たちが苦難や困難を経験する時、自分の心の苦しみや不安を除いてくれる何かを求めていたりしないでしょうか？ある人にとってはそれは音楽かもしれませんし、ある人にとってはそれは旅行かもしれません。ある人にとってはおいしい食事かもしれませんし、マッサージ、ゲーム、携帯、テレビ、映画。人それぞれ、私たちが慰めを求めるものとして思い浮かぶのは、そのようなものかもしれません。私たちはどこかで自分の心を取り巻いている感情、気持ちをほっとさせてくれるものを慰めだと考えていたりします。

パウロがここで触れた神様の「慰め」、神様が私たちに、パウロに与えた「慰め」はこのほっとさせるというものではなかったのです。先ほど挙げたような私たちが考えつくさまざまな慰めを与えそうなもの、それは確かに私たちを一時的には和らげ、平安をもたらすかもしれません。そのことを私たちはよく知っているのですが、同時に、そういった慰めは一時的で、私たちに揺るがない平安、揺るがない安らぎを与えることはできないことも皆さんはよくご存じです。この世は心を安らげることを慰めと考えます。

## 1) 慰めとは？

では、パウロが経験していた神の「慰め」とは一体どのようなものだったのでしょうか？ここで使われている「慰め」ということばは、「～に連れ添って励ます」、「勇敢な、力強い」といった意味が含まれています。つまりパウロが経験していた神様の「慰め」というのは、単にこの世が考える私たちの人生から苦しみを取り除くものではないということです。神様の「慰め」というのは、たとえ困難の中にあっても、それを耐え忍ぶことができるように神が与えてくださる偉大な力と励ましたということです。もう一度言いますが、神様の「慰め」は、たとえ困難の中にあっても、それを耐え忍ぶことができるようにと神が与えてくださる偉大な力と励ましたのです。心を安らがせるものではなく、心に力を与え、その力によって忍耐を持ってその困難を耐え忍ぶことができるようにとするのが神様の「慰め」だということです。ある註解者は神様の「慰め」をこのように表現しています。「神の慰めは弱った者の足を強め、しぼんだ心を奮い立たせる。その結果、その人は決して折れることのない意思と燃えることのない確信を持って人生の困難に立ち向かうことができる」と。私たちは慰めを得ることによって、困難から逃げ出すのではないのです。苦しみの中にあっても、神にあって力強く歩んでいくことができる、そんな「慰め」を神は与えることができるのだと。これまで見てきたように、パウロは多くの苦しみや試練を経験していました。彼は肉体的に痛み、精神的にもさまざまな苦しみや周りからの圧力を受けていたことも明らかです。

しかし、そんな彼は苦しみの中にあっても次のように言うことができたのです。同じⅡコリント12：9－10に「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と記されています。パウロは自分が使徒としてキリストに忠実に歩もうとする時、迫害を受けることはよく知っていました。彼はⅡテモテ3：12で「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と記しました。またイエス様も同じことをヨハネ15：20で「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」と言われました。パウロは確かにイエス様が約束されていたとおりに、キリストの名のゆえに福音のために迫害を受け、苦しみの中にいました。肉体的には痛み、疲れによって体は弱り切っていたことでしょう。しかし、そんな苦しみの中にあっても、そんな絶望的に見える中であって、パウロは本当の「慰め」を与えることのできる神から目をそらすことを一切しなかったのです。皆さん、パウロの書簡を読んでいて不思議に思うことはないでしょうか？これほどたくさんの苦痛を味わっていたにもかかわらず、パウロはどうしてこんな苦しみを私は味わわなければいけないのですかと、神様に対して不満や不平を言うことは一切なかったですし、また苦しみから逃げ出したいと口にすることも一切ありませんでした。また、彼はキリストの使徒として、味わった苦痛や苦難を別の人に嘆いてみたり、自分を迫害する者に対して、けなしてみたり、怒ってみたりすることもなかったのです。彼はどんな困難の中にあっても、神の「慰め」を持って力強く歩むことができました。それは彼が神こそが私の「慰め」の源であるということ、この神様のあわれみは決して変わることはないものであることを、そして神様の「慰め」、神様が困難の中に働かれる偉大な力はたとえどんな状況に置かれていたとしても、自分を励まし、奮い立たせる力があることをパウロはよく知っていました。神様の力は確かにその中であって、私を前に進ませると。

## 2) 私たちの歩み

問題は私たちはどうかということです。この世にあっても私たちが福音に忠実に歩もうとするならば、必ず私たちは戦いや難しさを経験します。それはイエス・キリストが言われたとおりです。問題はそんな時に私たちがどのようにその困難や難しさに対して振る舞っているかということです。私たちはいつもこの「慰め」の源である神様に目を向けて、自分のすべてを委ねて歩んでいるのでしょうか？それとも何か自分の中にその状況をコントロールする力があるかのように、自分の知恵や力に頼って歩んでいるのでしょうか？インターネットを見ればたくさんのことが書いてありますけれども、困難があったとしても、ポジティブに考えれば大丈夫、自分がポジティブに考えるその意思によって困難を乗り越えることができるとこの世は教えます。私たちはそのように生きているのでしょうか？私たちは自分の意思に頼って問題を乗り越えようとしていないのでしょうか？ある程度の問題は自分の力でやって、自分の手に負えない問題だけは神様のところに持っていきこうと、自分で苦しみや困難の違いを決めて歩んでいないのでしょうか？これは神様に委ね、これは神様に委ねない。そのような歩みを私たちはしていないのでしょうか？

ポール・トリップ先生は次のように言っています。「覚えていなさい。あなたの弱さがあなたのうちに働く神を妨げるのではありません。自分は強いのだという思い違いがそうさせるのです。主の力は私たちの弱さのうちに完全にされるのです。だから、あなたの弱さを進んで認め、主の強さに目を向けなさい

い」と。私たちが苦しみの中にある時、私たちのうちに働こうとしている神様の「慰め」の力を、私たちは自分ができるというプライドで妨げてはいないでしょうか？私たちは苦しみの中にある時、一体どこに「慰め」を求めらるのでしょうか？私たちはこの世の教える慰めを求めていないでしょうか？時にある人はこう思うかもしれませんが、自分がクリスチャンだから苦しみ、だから難しさを感じるのだと。だからキリストを捨ててしまいさえすれば、そのような困難から解放されるのではないかと。私たちが覚えなければいけないことは、このキリストのうちにのみ私たちの本当の「慰め」があるということです。

この世が私たちに教える慰めは私たちの心を本当に満足させることはありません。キリストを捨てて歩む、キリストにすべてを委ねて歩まないことは、私たちがこの世で唯一経験することのできる神の「慰め」をみずから捨てて歩んでいるということです。私たちの本当の「慰め」は、この神のところにあります。神が私たちにどんな時にあっても慰め、どんな時にあっても力強めて歩むことを可能にしてください。確かに神様の「慰め」はあなたが抱えている問題をすぐに取り去ってくださるようなものではありません。私たちが苦しんだり悲しんだりします。しかし、神様の「慰め」は私たちがその困難にある時に、その困難を乗り越える力を私たちに与えてくださるのです。神のあわれみは決して変わらない。その変わらないあわれみをもって私たちに強め、励まし、困難の中にあっても主に忠実に歩むことを可能にしてください。私たちが決して忘れてはいけないのは、私たちが私たちの力によって救われたわけではないということです。ここにいるだれ一人として神の前に自分の力でもって救いを達成できた者はいなかったということです。すべての人が滅びに向かっていました。でも私たちに何もできなかった。私たちに救いを与えてくれたのは、私たちが何かをしたからではありませんでした。こんな弱い愚かな私たちにあわれんだ神様が恵みによって、イエス・キリストによって私たちに救いを与えてくださったのです。私たちに何にもできなかった。だから神が恵みによってあなたを救い出したと。

私たちがクリスチャン生活を歩み始めた今も変わることはありません。私たちのうちには何もないのです。私たちの力や私たちの意思が困難の中にあっても私たちに支えるわけではありません。この世界を造った、この世界を造る以前からおられた神の変わらないあわれみが私たちに困難の中にあっても慰めてくださると。私たちの中に何か私たちが誇れるものはありません。私たちが誇ることができるのは、パウロも言ったようにキリストだけです。私たちが神の力、ただそれだけに頼って歩むのであれば、神が私たちの想像をはるかに絶するような「慰め」の力をもって、私たちの日々の歩みを助けてくださる。この神の与える「慰め」は私たちのうちにもともと備わっていたものでも、私たちのうちから出て来るものでもありません。この世界の主権者である神様が自身に恵みとして与えてくださるのです。私たちの特権、私たちができることは、この神様に信頼し、そしてこのお方が私たちにしてくださった約束を覚え続けることです。I コリント 10 : 13には「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいませぬ。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」とあります。私たちが神様の「慰め」の力にのみ私たちの心をすべて明け渡し、決して変わることはない神様のあわれみだけに頼って日々を歩んでいくのであれば、私たちがパウロと同じように神様の「慰め」を日々味わいながら、生きていくことができるのです。そんな約束が私たちに与えられているのです。

### 3. 慰めの目的=互いに慰め合うこと

そして最後に、「慰め」に関して三つ目にパウロが教えたことは「慰め」の目的についてです。「慰め」の目的について4節の後半にこう記しています。「こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」この「こうして」ということばにチェックを入れておいてください。「こうして」ということばは、それまで述べてきた内容を受けてその目的を續いて記すために使われています。要するに、神様が「慰め」の源であるということ、神様がご自身の「慰め」を苦しみの中にあるパウロに与えたということ、これらはすべて最終的な目的である「こうして」の後に続くことにつながるのだということです。そしてその「慰め」の目的というのは、きょうのタイトル「互いに慰め合うこと」でした。パウロはここでシンプルにこう言ったのです。もし私たちが偉大な神様の偉大なすばらしい「慰め」の源を知っていて、もし私たちがそんなすばらしい「慰め」を日々経験しているのであれば、それを知らないあなたの兄弟姉妹にその同じ「慰め」をもって慰め合いなさいと。神様があなたに与えたその「慰め」でもって兄弟姉妹を慰めなさいと。私たちが神様から「慰め」を受けたのは、自分だけが困難の中にあっても忠実に歩むためではありませんでした。かわりに私たちの周りにいる兄弟姉妹に神様から受けたその同じ「慰め」でもって、まるでリレーでバトンを次の人に渡すかのように、次から次へと神の「慰め」を広げて受け渡していくことが求められていたのです。

私たちがキリストを愛して、この主に忠実に生きていこうとするならば、その歩みをもとにするのできる、そんな兄弟姉妹は私たちに必要不可欠です。私たちに神の家族が、そしてその家族

がキリストのからだとして働くそんな教会が必要なのです。国籍も年齢も文化もそんなものは一切関係のない、ただキリストのすばらしい救いのわざにあって一つとされた者たちが神にあって互いに交わりを持つことができる、そんな特権を私たちは今持っています。でも罪人が互いに集う教会だからこそ、私たちはいつも互いに労わり合い、励まし合い、そして慰め合うことが大切になります。パウロも「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに痛み、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」とⅠコリント12：26-27に記されていました。いつでもどんな時でも私たちは互いに慰め合って生きていきなさいと。もちろん私たちはそのことを望みます。しかし、私たちが痛みを経験する時、ああ悲しい、ああ苦しい、神様も周りの人も自分から遠く離れてしまったと思ったことはないでしょうか？。痛みや困難は私たちを孤独な気持ちにさせたり、すべてのものに見捨てられたような感覚を私たちのうちに生み出します。そしてそのことによって、見えるものは自分の今の痛みだけ、周りのものは一切見えない、そのようなことに私たちは陥ってしまうことを経験します。

また私たちが痛みに遭遇する時、これは私の問題だからとあなたは別に関わらなくていいよ、私が解決しますからと自分から身を引いてしまったり、自分の殻に閉じこもってしまったりしたことはないでしょうか？聖書がこれまで教えてきたことは、私たちは痛みの中であって、神様の「慰め」を経験することができるということでした。そして私たちが覚え続けなければいけないのは、その同じ「慰め」を持って私たちはどんな状況に置かれていたとしても互いに慰め合うことができるし、それを行うことが神様の望まれていることだということです。パウロは自分が苦しんでいたがゆえに、同じく苦しんでいる人を慰めることができました。彼は自分が同じ経験をしていたがゆえに、心が苦しんでいる者、途方に暮れている者、いろいろな不安を感じている兄弟を助けることができたのです。もちろんパウロはここでほかの人の痛みを理解するために、あなたがたはもっと苦しまなければいけないとか、私たちがパウロと同じような困難や苦難を経験しないといけないと言っているのではありません。ここで言っているのは私たちの通るどんな小さな問題も、どんな困難や痛みも私たちが主に信頼して「慰め」を味わうのであれば、その「慰め」でもって同じ経験をしているほかの兄弟を慰めることができるということです。

私たちが痛みを経験する時、実はそれはお互いに慰め合うことを実践する機会だということです。そして私たちがこの大切さをよく知っています。皆さんがすごい痛みを経験する時、まずどんな人に相談するのでしょうか？恐らく皆さんは以前自分と同じことを経験した者、自分と同じ境遇に遭った者のところに行って、私はこんなことで苦しんでいます。私はこんな痛みを持っていますと言って相談をしないでしょうか？同じ痛みを経験した人は同じ痛みを経験した人に最も「慰め」を与えることができます。そしてそのような痛みの中にいる兄弟たちと慰め合う時に、痛みの中であって神様が実際に働かれたことをシェアし合う時に、私たちはその痛みを乗り切った自分を誇るのではなく、あわれみ豊かな力ある神様がこんなに弱い愚かな私を困難から救い出してくださった、ああ、なんてすばらしい神様なのだろうと、兄弟姉妹とともに神様をほめたたえることができるのです。パウロがしたように、痛みの中であって「慰め」の源である神を私たちが同じようにほめたたえることができるのです。パウロは実際にそのように生きました。本当の「慰め」の源が神様であることから一切目を離そうとせず、痛みの中にあつた時には、この神様から受けた「慰め」に信頼してどんな時も喜び、どんな時も平安を持って、どんな時も感謝を持ってパウロは歩み続けたのです。そして彼はそこで終わるのではなく、その同じ「慰め」、同じ神様の偉大な力を愛する兄弟姉妹とともに分かち合い、慰め合って歩んで生きていたのです。

パウロはキリストが命じられたとおりに最後の最後まで周りに模範を示し続けました。問題は私たちひとりひとりの歩みがどのようなものかということです。自分自身に問いかけてみてください。あなたの痛みに対する態度は、周りの人が模範にしたいと思うものでしょうか？あなたの中に働かれている神様の偉大な「慰め」の力は、周りの人に明らかになっているのでしょうか？そのような偉大な力を私たちはほかの人に分かち合いたいと、そのような思いを持って歩んでいるのでしょうか？もちろんすべての人に自分の持っている悩みを全部打ち明けるといっているのではありません。そのような必要はありません。しかし、今このようにして歩んでいる中であって、あなたには自分のどんな困難も、自分のどんな痛みも分かち合うことのできる兄弟姉妹はいるのでしょうか？私たちに苦楽をともしする、神のすばらしさをいつでも共有することのできる兄弟姉妹が必要なのです。ですから、もしおられないと言うのであれば、神様がせっかく私たちに苦難、試練を通して、痛みを通して、神のすばらしさを明らかにする、神のすばらしさを分かち合うことで神をもっともっとほめたたえる機会を逃してしまっているということです。もう一度言いますが、私たちの歩みには必ず痛みと喜びをともしする兄弟姉妹が必要です。あなたにはそのような人がいるのでしょうか？もしおられないのであれば、その人が与え

られることをまず神様に祈ってみることが大切です。

さて、今朝、私たちは聖書の教える「慰め」についてパウロから学んできました。「慰め」の源は神様ご自身であると、そしてそんな神様はこの世界を造られたすべての最初から今の今に至るまで、そしてこの先も決して変わることはないあわれみをもって、ご自分の民をあわれんでくださると。確かに神様の「慰め」というのは自分の問題をすぐに取り除いてくれるものではないけれども、いつもどんな時も私たちが苦しみの中で、忍耐を持って主に忠実に歩いていく力を神は私たちに与えてくださると。そしてそんなすばらしい神の「慰め」の力を知った私たちが互いに慰め合うのであれば、そのことを通して、神様の栄光が現されると。パウロがしていたように、今日の私たちもそのように歩むことができます。

もしこの中でまだ神様の本当の「慰め」を知らないという方がいるのであれば、ぜひきょうこの本当の「慰め」を知って帰ってください。そしてこの救い主イエス・キリストにきょうすべてを捧げて生きていこうとしている皆さん、最後にパウロがⅡコリントを書いた約5年後ピリピの教会に宛てて書いた手紙の中で言っていることばに耳を傾けてください。ピリピ4：11-13の中に「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」とパウロは記しました。パウロをどんな苦しみの中にあっても支え励ますことのできた、そんな「慰め」の力が、そんな神の偉大な力がきょう私たちにも与えられているということです。そんな神がきょう私たちとともにいてくださる。確かに私たちはそれぞれさまざまな苦しみや困難をこれからも経験することでしょう。私たちは、心の中で不安を覚えたり苦しみを抱いたりしてしまいます。私たちが覚えなければいけないのは私たちの中にはその苦しみを耐え抜く力は一切ないということです。しかし、私たちの涙も、私たちの苦しみも、私たちの痛みも、私たちのすべてを知っておられる神がきょうあなたとともに歩み、そして苦しみの中にあつたとしても倒れることのないように神の「慰め」を与えてくださると。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです」と。ですからどうかこの神様だけを見詰めて、本当の「慰め」だけに心をとめて、この主に頼ってほめたたえながら、ともに慰め合いながら生きていきましょう。ぜひそのようにきょうから歩んでくださることを願っています。